



繪本回村物語
五

979
5



遠門
號 979
卷 5

復讐 田村物語 卷之五 上卷

武關 川上 魁 老 編輯
下流 梅梢軒關旭 訂正

第九回 武門の花

其時田村春彦の白雪は藏人の波し。月雪娘の消息と取り
も遅しと披れえまの母。潮ふ浸る乾も中ね御ふまれば滴る
栗も君の涙の露るるわと徑返こいえまの母始りぬ嚮の御答
懇ふかひ者さむひ都の親戚とて變するりしなれど唯明も
暮てもそねこの空而已ら録以つ見へまわせんも憑か死る
かた月日次第しあはしの切なれ御志代いとも細やふ記し將此
度不意とよめて歎を知らるる。傳ふ佐々木民部が歳頃日ご落

田村物語 卷之五



ころろを盡せるふよれり。去るに其委れを民部より書記して告
 進らるるなれお能く熟し見多し御事なりしに。いと哀おやるが
 なく又巻込ありし民部が書翰をも取らせりあふ。近頃竊お付入交。
 弓木甲斐守照門岩岸刑部太郎成等深くも討り設け大伴
 貞純大伴高貫亦を荷擔太子以欺。延壽石以て終ふ亡君
 前田麿を冤の罪おとしすわくせし。且白波が狂乱おして市中お
 吟ひ彼亦が密計を悉く口走り。事既お顯れんとすお及んで照門
 始め皆逃失され次第すて残なく書記し就る。往年別はなすお
 臨み密お仰ありしごとく。今そ其敵を知らんはとく復讐言と思し居
 たらふおひて如何おも明慮あえしこの告なりけし。田村麿のこれ
 を御覽しなご。無念肝腸お徹し。おろご御髪逆小立昇り忠孝

節烈の意氣盛はして恰も荆軻が髮冠以衝んとすお不等く容
 貌常お替りせり。いづれ又もゆゑ静めて再三再四らる。熟しこ
 へ多しひて天お喜び地お悦び。ほつと息けきて宜く有か。や今日只
 今正しく其敵お知らる。されば今お合さる。父上の末期お益
 とも看とて多かりし古歌をかりそえのゆき田斐らともおひに。
 今ハかきりの門出りりなりと在原の志げもる。歌を記しし敵と
 おり。弓木甲斐も其初目前お檢使の役なれ。是は倭倅の態と
 古人の歌を借用ひて人おは其こと流を擬某お推察せし。離
 成報せよとの御事ならん。その所以如何となれば。かりそめのゆき甲斐
 らとともひに。是は弓木甲斐ハかりそめの人とごりおひ
 多し。不圖奸計お達し。ひねとなり。又下の句に。いまかきり

の門出なりけり。上よりいふごとくなれば、終に家族等も顔を得
 ありせむ。死されしよしと云意に擬するところを察し、はいつせ
 たり。尤もれば民部が告知せしむも、能も符合せりと宣ひて。
 濱辺に堪はるは是より御ちの海に交せられ。如何もして此鳥を
 暗に逃し出忍びに敵を尋んぬの成と。ひとごとく其計畧をそ
 回されしは斯く都の右大臣藤原の是公中納言兼左種継
 小會合あり。いづれも計りて弓木照門岩岸刑部太郎牛外大伴
 貞純大伴高貫等の人が草を分ても尋出さんぬのと。檢
 小肺肝にされしは、今ふその便に得と然る勢別鈴
 鹿郡の知縣より。早馬に託せし告され、近頃鈴鹿山の山中に
 怪けなれ人多く住す。其は悪鬼のこゝ。珠小神通廣大

志く。不測の妖術を行ひ、往來の人を悩。又あてに近郷の人家
 に闇に財寶を掠り、美女を棄てて山陣小携。をしこれ逆
 りのに忽ち打殺し。切殺され給ふ人、あはれあそ悪業除境
 て頃日を願官府に告げ、思ふごとく傍若無人の行跡をばしめむ。
 是に靜んがため、某自ら官軍を帥て搦捕とせしに、実おそるげなる
 鬼とも人も分かつたが、赤き髪は左右に乱し、腰に虎豹の皮を纏
 面色或は赤く、或は青に悪鬼も二三十がほど、夕出鉄棒又ハ戦
 を取て打向る勇力、如何にも敵にがごとく、二度三度戦ひし。終に
 勝事を得、刺へ彼等が為ふ人多く死す。今更ふ詮とせむ。それを
 いかなる者か、此山中にいたれば、人々竊に間者に入し、其様子を見
 何ぞぞうらん。岩岸刑部太郎こそ、山陣の魁首となり。今も韋駄天



鄂くまがたの公卿
會あひまひ合あひまひままひひて
鈴すず赤あか山やまへの
討う手て誰たれ彼か
とと守まも候まうは

大江團房

とんぼ



是公卿

刑部と名を天^{てん}地^ちかかれ人^{ひと}欲^{ほつ}を縦^{たて}し周^{しゅう}く無^む頼^{らい}の悪^{あく}俗^{ぞく}を集^{あつ}め
 けはし足^{あし}組^{ぐみ}する者^{もの}もあ^ある隱^{おん}刑^{けい}鬼^{おに}毒^{どく}丸^{まる}霹^{ひく}靂^{れき}段^{だん}平^{へい}天^{てん}魔^ま八^{はち}孫^{そん}鐵^{てつ}
 權^{けん}二^に鬼^{おに}首^{くび}眼^{まなこ}孫^{そん}鐵^{てつ}軍^{ぐん}太^{たい}足^{あし}亦^{また}以^{もつ}始^{はじめ}として其^{その}勢^{せい}幾^{いく}とらふ^らみ^み知^しる^ら
 山^{さん}寨^{さい}不^ふ満^{まん}て次^{つぎ}身^み不^ふ勢^{せい}増^{ぞう}ゆる^る今^{いま}はとや某^{その}力^{ちから}に及^{およ}び^び速^{すみ}
 不^ふ官^{くわん}軍^{ぐん}以^{もつ}し向^{むか}はれ^れる万^{まん}民^{みん}の憂^{うれ}を拂^{はら}ひ^ひま^まら^らん^んも^も願^{ねが}はれ^れ
 の^のみ^みなり^{なり}は^は是^{これ}公^{こう}卿^{けい}大^{だい}に^に不^ふ驚^{おどろ}ひ^ひて曰^{いは}近^{ちか}比^ひ傳^{でん}は^はく^く勢^{せい}勿^な鈴^{しん}
 鹿^か山^{さん}不^ふ強^{かう}盜^{たう}住^じる^る人^{ひと}民^{みん}を惱^{なご}ま^ますと^と沙^さ汰^たを^をわ^われ^れば^ば斯^{しか}ま^まて^て大^{だい}膽^{たん}
 か^かれ^れ行^{かう}跡^{せき}を^をま^まさん^{さん}と^とか^かり^りひ^ひさ^さや^やして^{して}其^{その}依^よる^るも^も速^{すみ}不^ふ討^{たう}を^を
 ば^ばし^し下^{くだ}え^えん^ん不^ふ誰^{たれ}う^う打^{うち}向^{むか}う^う妖^{よう}鬼^{おに}退^{たい}治^ちせん^んと^とわ^わり^りけ^けは^は列^{りく}居^こる^る
 人^{ひと}も^も皆^{みな}目^めと^と目^め以^{もつ}て^て合^あせ^せる^る未^{いま}だ^だ答^{こた}へ^へる^る者^{もの}も^もま^まり^りし^し不^ふ遠^{とん}未^{いま}坐^ざ
 より^{より}一^{いち}人^{ひと}の^の健^{けん}男^{なん}進^{しん}と^と出^で某^{その}不^ふ三^{さん}百^{ひゃく}余^よの^の兵^{へい}を^を授^{まか}せ^せら^らる^るは^は魔^ま軍^{ぐん}悉^{しつ}く

暫時^{しばらく}あ^あら^らち^ち亡^なし^し。韋^{わい}駄^だ天^{てん}毒^{どく}丸^{まる}か^かひ^ひ扱^{つか}ん^ん持^もつ^つ人^{ひと}と^とい^いふ^ふ
 勇^{ゆう}に^にし^しく^くは^はへ^へけ^けは^は是^{これ}公^{こう}卿^{けい}を^をば^ば満^{まん}座^ざの^の人^{ひと}に^に驚^{おどろ}ひ^ひて^て足^{あし}を^をん^んれ^れ
 は^は弓^{きう}削^{さく}大^{だい}進^{しん}大^{だい}江^{かう}國^{こく}房^{ぼう}と^とい^いふ^ふ者^{もの}なり^{なり}此^{この}國^{こく}房^{ぼう}は^はえ^え中^{ちゆう}納^{なつ}言^{ごん}種^{しゆ}繼^{けい}
 々^々少^{せう}く^く所^{しよ}縁^{えん}ある^る者^{もの}あり^りけ^けれ^れが^が彼^{かの}頗^{ぜん}武^ぶ勇^{ゆう}あり^りと^とい^いふ^ふ其^{その}言^{ごん}
 實^{じつ}なる^るも^も常^{じょう}に^に慢^{まん}を^をれ^れの^の公^{こう}あ^ある^るが^がゆ^ゆゑ^ゑ種^{しゆ}繼^{けい}郷^{かう}を^を疎^そく^く
 親^{おん}う^うと^とば^ばと^とぞ^ぞ然^{しか}れ^れ不^ふ種^{しゆ}繼^{けい}々^々も^も此^{この}日^{にち}傍^{ぼう}に^に在^あり^り今^{いま}國^{こく}房^{ぼう}が^が大^{だい}言^{ごん}
 其^{その}苦^くしく^くお^おら^らひ^ひ身^みひ^ひて^て宜^{よろ}ひ^ひな^なれ^れ如^{ごと}く^く不^ふ國^{こく}房^{ぼう}御^ご邊^{へん}鈴^{しん}鹿^かの^の魔^ま軍^{ぐん}
 を^を等^{とう}困^{こん}ふ^ふる^ること^{こと}勿^なし^し是^{これ}御^ご邊^{へん}の^の相^あひ^ひに^にあ^あら^らは^はる^るは^は外^{がい}不^ふ良^{りやう}わ^わ
 撰^{せん}んで^で向^{むか}ふ^ふ人^{ひと}あり^りと^と云^いふ^ふ終^{はつ}に^に不^ふ國^{こく}房^{ぼう}又^{また}い^いら^ら種^{しゆ}繼^{けい}郷^{かう}と^と
 兼^{かね}て^て某^{その}言^{ごん}其^{その}実^{じつ}よ^よる^ると^とて^て疎^そく^くも^も多^たく^くも^も如^{ごと}く^く不^ふ此^{この}場^{ばう}は^はお^おい^いく^く
 自^{みづか}ら^ら言^{ごん}を^を喰^くつ^つ上^{うへ}に^に欺^{あざむ}く^くも^もあ^あら^らん^んや^やと^と面^{めん}色^{しき}を^を入^いて^てし^した^たれば^ば其^{その}

時是公御種継々々顔々々曰斯斗彼が行んるんが少くも受
 なくてハヤははし。さうさ其旨を敷聞ふ達。望のごとく二百余の
 兵の授へた。能慮次流し遊じくすんぐさば。さうく魔軍次
 手は。日出度凱歌を唱へ帰陣せよと仰て。其日の評議を止お
 ちり。頃しも延暦廿一年の冬。十月初旬ありしが是公御件のこと
 とも天皇小委聞したるひて終ふ大江國房へ三百餘の兵士を
 授へし。多心らうら向く功次立よとありされハ。國房の面目を施し
 勇に進んぶ。十二月十日に都とまき。不日に勢別鈴鹿郡陸麻山
 の麓あぞ到着し。此沙汰先達く鈴鹿の山陣おまけ。是と章駄
 天これを受て笑う。曰。御方今既ハ勢ハ盛んあれハ。終ふ都へ
 押寄。王位ハ侵て。我四海の君とせん。とこそまされハ。官軍の委

す。んハ顔々々。い。て彼亦我。が。並。知。り。て。其。名。を。裏
 かん。あ。つ。と。直。に。鐵。權。二。次。呼。ん。で。討。つ。授。け。又。隱。形。鬼。毒。丸。霹
 靂。段。平。天。魔。八。藏。等。に。か。う。く。其。計。を。物。し。其。符。の。面。々。
 如此。と。さ。分。か。定。め。日。の。暮。ろ。瓜。ぞ。待。居。り。扱。も。冬。の。日。の。ゆ
 かり。斜。日。早。く。も。落。磯。く。た。れ。霜。月。既。ハ。山。の。塔。小。鼻。了。森。々。る
 木。の。下。闇。の。物。凄。れ。不。弓。削。大。進。國。房。ハ。今。宵。鈴。鹿。川。を。隔。て。軍
 次。屯。し。大。箭。と。林。火。連。一。夜。人。馬。以。休。り。て。明。ろ。ハ。攻。登。ん。と。嚴。重。お。控
 へ。折。々。ら。鈴。鹿。川。の。方。より。一。人。の。大。男。二。ツ。の。桶。を。荷。ひ。何。中。ん
 け。お。ら。と。獨。言。し。て。國。房。が。屯。せ。れ。陣。の。服。忍。び。中。に。回。り。て。
 過。行。ん。と。せ。し。兵。士。卒。亦。早。く。も。これ。を。ん。異。や。此。所。を。登。り。人
 跡。迄。く。近。頃。と。い。し。は。城。の。為。お。劫。され。忍。び。さ。る。もの。も。な。れ。彼

いうる者も大膽も夜中此所を過る中若くは山の方
 より尋ねる人歎いと不審はよ何れあれ尋ねる人土卒を西に
 人うち向ひて如何お夫よ尋ねる何者うらぞいごとより尋ねりて此
 夜中にこの所を過るや將其荷へれ桶を如何ある者そと尋ね
 同歩人足はけりて大に驚死心也二つの桶を打捨跡をも見せし
 て進行が曲者よ捕と操ふ操ふして追々間近くなれりてお
 飛りゆく襟を掴んで引戻せば振放さんとすお所を引手馬を
 より立かき押して縄を掛りて去りし。去りし士卒事件の丈男を縛
 及び二つの桶を携りて陣中に繋ぎぬり審みその趣を國房に告げ
 されば國房と急ぎ立ち出て彼男を問ひし。汝は是いつなる者なれば
 夜中に此所を過りいごとより何地へ行んとすお明も告ぐんハ速に

命は終をせしと威しけ高きなりて尋ねり同歩彼男と齒の根も合を
 戦慄してし。相公は怒り静め某斯なれ上り実情は
 告奉らんお。かろうと一命を助め某は近江の國土山の驛
 中居住をせし小七とける土民なれが我家お昔より美酒は
 作るの良法を傳へり。代々名酒を造りて流業とせしお近頃
 鈴麻山の妖鬼お。切してし。汝酒を賣んとするは常
 小我山陣に登りて酒を高む山陣の爲も便しお。在てこの
 事肯む此より汝も幾の益を得べし。若又我山陣に酒を
 りて固辞ば直母この酒店を踏破つて。家内塵ふらんと
 のことなれゆゑ妖鬼お。為し酒を賣るゆゑ官府への忌められ
 ぬ何れも是を肯むお。若肯むら射といふ成憂れ申連

も知れば命を替がく辛じて二里余の道を酒を携て日の暮る候待山に登り妖鬼亦賣ふへ其夜へ山止宿は。明日も夜入る後又暗山を下り土山の驛に宿りぬなり。然し昨夜も酒ものごとく酒を商ひし。近頃其直えちかく償ふ。只魯酒を乞求るゆゑ某の酒を我酒を商ててもその利益を得く。えでとせむこそ名酒をも仕出さる。左のり此頃直入滞アとく如何せよく多く酒を賣りぬ候と云ふ。妖鬼亦もえより件の名酒を好む此断みこ流伏しぬなり。然しは直を償んげと云ふ。此頃と実小銭の乏しは是を以て行て銭お替よと云ふ。虎の皮は擧鼻禪をこの酒桶の中に入置く。又明日の夜も酒を持来れり。さうと云ふ。此古き虎の皮の擧鼻禪

を何せん餘り妖鬼亦が某慢こと甚しければ公中樂々々次獨言しは往りて思つて相公の屯しなすこれ陣前よゆさか。公驚れあひ中りに道はゆりてゆるとせし。斯はいほしや。此場と云ふのばしなす。此以後某が家次遠く化所お移て妖鬼亦が為小酒を賣こと候と云ふ。は。免たり人と云ふ。くら。佐々れおぞ國房これを笑す士卒に命じて件の桶の蓋を開たえれば酒の薫而已して空桶の中に行厨の包と二三百の銭あり。又一ツの桶をこつらぬ。突も小七がいひし違つて。虎の皮は擧鼻禪のとうきく毛を脱果皮の面木目のどれ。文と半らせり。敬し。後つけ杯して入置ぬ。國房これを笑す。公中におりて一笑

借ふ。又同く。如く。如何も。汝が。次と。実情も。あらん。れ
と。彼山陣。通れ。唯。疑ひ。解け。され。汝命。かへ。つが
為。彼山の。案内。あらん。我。速。小。妖。鬼。を。平。て。功。を。立。ん。汝。も
禍。却。く。福。に。轉。ぶ。の。時。なり。此。事。如何。あ。ら。んと。同。バ。小。七。飲
く。是。小。過。く。れ。易。れ。の。ゆ。べ。幸。な。る。う。好。彼。山。陣。あ。て。も。今。日
相。公。の。到。着。し。な。ま。つ。れ。な。れ。ば。よ。も。軍。の。明。日。う。ら。んと。油。断。く。
今。宵。と。某。が。酒。を。二。桶。も。飲。ら。ま。り。て。暫。時。お。傾。け。皆。大。の。み
酔。を。盡。せ。る。折。な。れ。今。う。速。に。攻。登。り。ま。り。その。伎。な。れ。と。討。く。
一。戦。お。功。を。遂。ぐ。あ。べ。一。某。命。を。助。け。の。大。恩。お。報。へ。れ。お。案内。を
仕。ら。ん。と。い。ふ。國。房。歡。喜。斜。つ。ば。夜。討。く。と。慶。せ。ん。と。い
天。我。お。切。な。ま。せ。る。時。なり。と。魚。附。踊。り。て。勇。進。と。衆。卒。と。催。促。し

小。七。が。案内。者。として。先。に。立。辭。く。と。押。出。て。暗。に。鈴。鹿。川。を。打。流。り。
巖。を。踏。か。け。藤。お。り。付。辛。じて。坂。路。を。さ。ぬ。れ。小。七。後。に。顧。み
り。らく。あ。れ。え。又。月。お。對。て。木。の。間。隱。れ。え。ゆ。り。則。妖。鬼。等
が。住。家。なり。相。公。暫。く。に。待。て。入。某。再。り。と。行。酒。の。直。に。求
れ。は。お。も。て。直。に。火。附。て。合。圖。が。あ。り。と。い。ふ。れ。その。時。一。度
お。攻。入。り。し。し。捨。て。足。早。ふ。と。走。り。往。ぬ。と。誰。う。知。らん。鐵
權。二。を。酒。賣。買。客。も。出。立。土。山。の。沢。な。れ。酒。店。の。小。七。と。い。ふ。名
酒。と。高。者。の。名。次。衝。れ。韋。駄。天。が。討。あ。せ。あり。た。れ。さ。る。夜
の。三。更。過。り。頃。寒。風。肌。を。穿。き。松。風。諷。くと。空。に。響。き。四。方。よ。り
声。々。物。凄。に。折。か。り。忽。ち。向。ふ。細。くと。火。燃。生。れ。が。さ。る。不
問。お。火。氣。盛。み。天。地。こ。じ。て。車。輪。の。ごと。く。焔。空。中。を。飛。あ。る。あ。そ

日寸 加 吾 云 云 云 云 云



鉄権二酒
とつて國房
の軍兵ホ
いんごう



鉄権一

ナリ小七が合圖の火矢掛られど續けや面くと國房の先に進
ハ官軍一度取詰む。石龕の門を打破りおめれ叫ぶ攻入りし
魔軍一人もえへど唯門内の廣き空地に柴薪と山のごとく
積上火炎盛ん燃れのみなれば國房案も相違して大に驚に板
と計お陥されり。悔りに慢て敵地お深入せり。とて後陣より
退れ出よと下知されハ官軍俄お度と失ひ我よ人よと混乱して
たよふ処をおりひも奇ふ以後の方より隱形鬼毒丸と名を赤
れ髪ハ風も逆立虎豹の皮と腰に纏ひ。四五十の魔軍は從へ
長れ戦と取り欠生する有さは左らぐ。惡鬼の荒る如くなれ
ハ先戦どして九分を魂を失ひられ。又も峽より霹靂段平巖
の蔭より天魔八萬魔軍は卒して討く出皆一揆の出らりめて

葛直子並立れハ官軍いづる敵とべれ尸を積む山のごとく血
と流し川に成りせり。國房ハ爰と先途と戦へども崩れたる官軍
の前踏と極火も行なれ地なく。後ハ敵は取切られ左右ハ岨く
山なれハ逃出るる方もなく。十方より折らぬ下圖つる
弓矢の方ハ巖の間ハ枯草も埋し。莎蓬あり。是ぞ若くハ技道
めと。俄ハ公臆し。未練も國房ハ件の間道へと走り行ハ大將
とて退さる。我いづて叶えれと。士卒等も跡も續く。魚貫し
て遁んと。さしも狭き莎蓬を我先と押合ふ。とて魔軍
ハ得らりと追からる。ハ忽天地も崩る音して憐れ。國房を始ら
渡り。官軍等一人も残らぬ。奔り入り。上と下へと蠢とと流
魔軍等速も追取擁て。終り悉く捕捕凱哥。こそわげりたる。

去程子妖鬼亦ハ件の火打消し。烟房を傳へ山陣に連なり。韋駄
 天の前より出せ。後もなく隠れ鬼亦も合身なり。其時
 韋駄天も上座なり。後草の上へ安んじて。雷のこゝろを声し。勵して之
 ら。汝何者か。我此山陣を忍び。敢て事つ。虎の鬚を取んと
 され。今汝亦殺さ。易たれど。蟲を殺すとに等し。我汝仁公
 命の助をす。汝を。急に都に送り。鈴鹿山乃
 鬼神亦不日は都に攻登るべし。首を洗つ。待べ。之の疾く
 彼等。剥取耳鼻を。家土産させよ。下知され。鉄櫃二
 鬼首眼藏。始。と。か。赤裸と。而。後
 或も鼻を。又も耳を。是こそ。都への家土産。同音
 こころと。追拂ひ。大悪無道の處置なり。されども

國房亦も命助。暗に。若痛忍び。夜の内。小道を急
 げて。我陣に。顔と。只忙然。なり。が。
 猶も。似氣。勝負。是。常。な。れ。ば。詮。と。な
 一。所謂。羊質。虎皮。者。辱。と。し。是。等。の
 人。と。や。い。な。る。扱。も。國房。の。如何。も。な。す。べ。し。術。あり。あ。は。く
 と。鈴鹿。の。陣屋。を。引。拂。つ。都。へ。立。ゆ。り。是。公。郷。の。籠。か。と。し。て。件
 の。物。語。自。慚。愧。耐。ど。罪。小。伏。し。是。公。郷。の。分。野
 委。尋。問。せ。後。宣。く。是。原。某。が。罪。なり。嚮。種。継。言
 と。り。し。む。所。な。れ。ば。如何。も。御。邊。の。奉。此。入。終。お
 奏。聞。な。す。べ。し。忠。勤。意。を。宣。ひ。す。外。寛
 仁。の。沙。汰。な。り。け。は。國房。を。深。く。心。小。伏。し。面。目。な。く。も。す。ご。と。

類^る行^く退^き出^るせり。斯^く是^れ公^御之^の夜^ハ獨^り眠^るま^りて。ひこ^とら
 思^ふ慮^を回^して。鈴^鹿の^女鬼^ハ等^困の^敵也^{ナリ}。去^りてお
 重^て官^軍之^差向^て若^勝率^ヲ得^ぞ目^次費^を付^ハ彼^ホら^よく
 官^府を^おと^りて。然^るの^ころ^には^天下^ノの^事も^いら^ぬ人^ニ。され^ば此
 附^おら^そ。田^村磨^之子^ヲ殺^して。爵^禄を^授け^られ^て。鈴^鹿の^討と
 一^ツ給^らる^に。一^ツの^女鬼^ハ靜^んん^の疑^ハな^く。二^ツの^女鬼^ハ彼^も公^のお
 寄^りて。父^ノの^讎を^も復^さす^べけれ^ば。勇^威日^ごら^ぬ十^倍。忠^孝兩
 全^ノ功^次立^た。新^田磨^之子^ノ汚^名も^も賤^よ足^らぬ。坂^上家^繁榮^{せん}の
 公^私も^も幸^甚なる^人と^志を^決す^る心^中お^深く^欲ひ^て。附^子
 を^待て^次の^日系^内の^りて^件の^ゆも^も天^皇へ^巨細^ニ奏^聞せ^ら
 せ^し。天^皇も^歡慮^らる^る。ち^かか^りて^田村^磨之^子を^歸す。

家の^の後^とま^りて^將彼^ガ武^勇の^経を^もつ^るべ^しと^{あり}。ち^かか^りて^是
 是^レ公^畏と^直ふ^大嶋^ガを^新田^磨之^子の^許へ^勅使^を以^て。件^ノの^宣
 旨^ヲ傳^らせ^られ^夫福^と邪^惡の^家に^入事^也。日^月の^曲定^を
 を^照す^ると^かや。坂^上の^田村^磨之^子父^ノ新^田磨^之子^ノ罪^ヲ達^給
 ひ^られ^りして。長^レ歳^月伊^豆の^大嶋^ヲ捨^てれ^身ヲ^千辛^万
 苦^ヲ受^とり^ても。忠^孝の^御志^はけ^るの^間も^怠り^なす^と也^也。
 佐^々木^民部^ノ出^づ。父^ノの^讐ハ^知れ^らる^人。如^何も^して^一先^此
 大^嶋を^逃れ^出。素^懐遠^レの^後ハ^再度^カ力^竭あ^り。私^ハ
 小^嶋と^去法^を犯^する^ノ罪^ハ腹^十文^字の^極切^死を^以て^謝す^る
 ぞ^と公^を極^て其^用意^頻なり^し也。お^りひ^きや^終て^天の^惠時^に
 至^りて^延暦^十一^年十^二月^二日^也。か^けも^も泰^なる^も勅^使之^の

田村磨の
配所之島
初使下向也



田村勿吾卷之五

十四



田村勿吾卷之五

十五

嶋に至り。田村實朝御赦免ありて。父前田實朝が舊領の地を悉く
 給ひたり。總て昔も復し。然而已う此度討ちの大将封多め急
 れ都へ登つて軍兵を整へ勢別鈴鹿の妖鬼を平け上を宸襟
 休めしもの。下り父の讎を報さ。將前田實朝を少く過有
 としつゝも元より忠義の公深うし。一旦照門刑部が奸計ゆより
 て。めく其家と亡し。そのつゝも。天皇も今更に深く慶應
 を痛しめ。その處なり。早くに功を立猶忠勤を励む。その旨旨
 たり。されば。田村實朝の始に夢のえられ。積年の雲霧忽ち
 晴る。公地して。謹んご君恩に謝し。西向を拜し。勅使を
 厚く款待してゆし。其御歡喜し。斗もあはれ。飛人正市も。陸
 奥に缺を絞つ。されど断られ去る。此件の赴を月登姫民部が

許へ告ぎ。せしむ。疾く迎ひの人敷を差越へ。と。父へ。されば。月登
 姫は。うら。種継御満千代の如。終ひ一方なり。以。勇と。進まぬ者も
 なく。民部をこそ。父より。愛う。う。と。勸喜。小耐と。直ら。小
 舊功の臣多と。呼集。於。是。父傳。これ者。とも。招へ。我も。く
 と。此。あり。つ。不。日。過。半。ハ。古。子。復。し。た。れ。も。速。に。古。に。御。館
 を。補。な。し。多。れ。君。父。の。久。し。く。奉。へ。し。供。奉。の。面。に。花。を。飾。り。夜
 成。日。に。継。ぐ。大。嶋。へ。至。り。し。田。村。實。朝。御。悅。斜。さ。し。昔。も。替。れ。旅。の
 如。き。其。の。故。美。く。安。重。に。舟。舩。の。ま。は。し。ハ。久。く。風。を。翻。り。て。歸。り
 来。よ。と。て。招。く。也。彼。の。鼓。と。樂。と。奏。し。既。小。大。嶋。に。立。出。り。あ。お
 漢。父。木。を。海。岸。に。お。ひ。し。伏。す。別。に。惜。ま。な。れ。也。此。歳。月。親。く。懇。ろ。う
 小。軍。の。悅。し。と。よ。と。多。く。金。銀。と。漢。父。も。給。り。其。の。悦。十。分。に。引。け。て

中 跡あり浪とよみ出する。其後もく都の館ふ着る人む此日種徳御
父子で始め親戚皆會合する。喜びて喜悅の眉を開かす。此
月聖姫のなりのうれしさに涙のこ先ふらして今更何よりか言は
ず人々と御さるの葉えさるしも思ひやうぞかりなり。田村磨也
御悦法、往來嶋ふらりてよりひてよりのく。白鷹の便又白雪
か水不瀾はしる。かか民部が告もく始と敵三三知る。此し
そで教くの物語落も好く云出さる。月聖姫も何と云と此年月の
事ども細中ふ語合ひる。其時種徳御宜く今宵
の旅の疲を休め。明るが泰内めりて君恩を謝せられ。將此度妹
鬼退治の勅命輕さる。能く終と盡し大功とせられ。此
從貴家の繁榮限りの。此の御物語の。此の日のれい。

れ 暮われハ間毎ハ燈火多く建連ひ。夜半の酒宴は旅の歎
聲小満く。皆千秋万歳と祝し。酔とほして退出せり。斯く明と
田村磨の才女清め服を改め。内めりて天皇御膝近ら。此
うね勅命めりて朕不明はして嚮め。汝が家と亡せし。返り悔も
及び。依る此度召は坂上家繁榮ある。且鈴鹿の妖鬼
ホ次第ハ増長して略天下の憂はなると。近頃弓削大進は房
を差向し。却て妖鬼ホが為ハ辱られ。多く宦軍ハ傷ひぬ。此
汝速にお向つて魔軍を平け。萬民の憂を拂ひ。傾お。功を立て。
家名を耀とせし。いと。此勅命。田村磨を感涙と止。此
謹く命を領し。御前ハ退れ。是公卿ハ對面。此勅命の
重れを厚く謝し。なされ。是公卿も後く。此會ハ

悦よろこび斜ななめらうらひ急いそげとしく馳かけ向むかつて功こうをまられよ待まち我われ仄ひそかづく。
弓ゆみ本もと照あ門かど大おほ伴とも貞まこと純まこと大おほ伴とも高たか貫つら寺てらりつりつの程ほどあり鈴すず鹿か山やまよ道みちは隠かくれ。
彼かの山やまの強つよ盜とう亦またと志こころ火ひ一ひとよはよは魁くわい首う韋わい駝た天てん刑けい部ぶお才さいとよせく共ともお
悪あく業ごうとほほねとこそこそ笑わらね將まさ足あしを平ひららんお官くわん軍ぐん幾いくり具ぐしたるらんや。
其その望のぞよ任まかさるこりつれハ田のち村むら管かん誂しんして宣のたまく某ま自みづか誇かくや
ハあつらんも唯ただ百ひゃく余よ騎きと授まかせらるハ某ま猶なほ世よ臣しん恩おん顧かんの者ものと
引ひ具きして誓ちか言ごて妖まじ鬼きと静しずまると宣のたまひ是こゝ公こう卿けいと示しし合あはれ退ひ朝あさあり
て速すみお軍ぐんと整ととのへ十二月じふにがつ十日じふにち小平へい安あ京きやうと打うち出ださるふ都みやこは勝かち人ひとと
門かど出でと祝いわはれ袂たもとと列らね。

田村物語 卷之五 上卷 畢



